

氏名(本籍)	佐藤憲一(茨城県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博甲第4528号		
学位授与年月日	平成20年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	トランスアトランティック・トランザクション -〈アメリカ文学〉前史-		
主査	筑波大学教授	博士(文学)	浜名 恵美
副査	筑波大学教授	博士(文学)	宮本 陽一郎
副査	筑波大学准教授	博士(文学)	吉原 ゆかり
副査	筑波大学講師	博士(文学)	齋藤 一
副査	筑波大学講師	博士(文学)	清水 知子

論文の内容の要旨

本論文の目的は、1630年の大規模移民の開始から1800年の第4回合衆国大統領選挙までの間のアメリカ北東地域で、19世紀以降に「アメリカ文学」と呼ばれることになるものを準備した実践、テキストの生成、それらの意義を解明することである。

本論文の構成は以下の通りである。

- 序章 トランスアトランティック・トランザクション序説
- 第1章 「息子のウインスロップ氏」の部屋
- 第2章 荒野から庭園へ
- 第3章 トランスアトランティック・トランザクション
- 第4章 我らのインディアンコーン
- 第5章 望遠鏡の使い方
- 第6章 共同体／協会の独立革命
- 第7章 父の白内障と「インディアンの食事」
- 結章 トランスアトランティック・トランザクション総括

序章は、先行研究を批判的に検討し、トランスアトランティックという地政学的概念の定義を行っている。ジョン・ウインスロップ・ジュニアに始まり彼に終わる本論文において、その大西洋を跨いだ往還が随所に残した痕跡を適切に評価するためには、トランスアトランティックという枠組が有効であるとする。

第1章は、今日の植民地期アメリカ文学研究では看過されているウインスロップ・ジュニアに関する伝記的考察を行っている。父親のマサチューセッツ植民地初代総督ジョン・ウインスロップの『日記』の中の逸話に現れている息子とその痕跡に注目し、この父と子の対立をトランスアトランティックな視座から解明している。

第2章は、ニューイングランド初の王立協会会員として、ニューイングランド自然誌収集プロジェクトに参画したウインスロップ・ジュニアの知的探究を取り上げている。王立協会誌『フィロソフィカル・トランザクションズ』に寄せられた会員の書簡が「記事」として出版されるプロセスに注目し、当時の王立協会における〈事実〉とは、〈事実〉らしく仕立て上げる作業を通して出現する〈事実〉であることを明らかにしている。

第3章は、引き続き、王立協会のニューイングランド自然誌収集プロジェクトを取り上げている。それが本国の支配欲に動機付けられたものであると察知したウインスロップ・ジュニアは、本国からの要求に見合わない情報を協会に書き送った。『フィロソフィカル・トランザクションズ』におけるニューイングランド自然誌は、本国の北米植民地への欲望と、北米植民地の本国への留保とが相互作用する地平に成立していたと論じている。

第4章は、ウインスロップ・ジュニアが部屋に保管していた穀物であり、17世紀後半のイングランドで新大陸の珍品とされたトウモロコシが、アメリカを表象するアイコンへと成長してゆく過程と、それが最終的にフランクリンにより完遂される瞬間を解明している。

第5章は、17世紀後半に望遠鏡を初めてニューイングランドに持ち込み天体観察に動んだウインスロップ・ジュニアと、そうした活動を抑圧した彼の〈擬-父〉といえるコットン・マザーとの間に生じた、自分で見た知識の是非をめぐる対立を解明している。

第6章は、イングランドのサミュエル・ハートリブとニューイングランドのウインスロップ・ジュニアの間で交わされた薔薇十字的の共同体計画、マザー父子によるボストン学術協会、アメリカ学術協会（現存するアメリカ最古の学術団体）を取り上げ、トランスアトランティックな視座から考察している。特に、アメリカの政治的独立により、ロンドン王立協会をモデルに成立したアメリカ学術協会の自らのモデル=起源に対する意識が顕在化するという逆説を指摘している。

第7章は、独立直後、自らをどのように定義するかという問題に直面したアメリカで、この問題に虚構文学という手段に関わったアメリカ最初の職業作家チャールズ・ブロックデン・ブラウン作の『オーモンド』を分析している。登場人物スティーヴン・ダドレーの白内障手術をめぐる記述を可能にしたトランスアトランティックな知識の流れを考察してから、彼の視力の回復を描くこのテキストが1798年アメリカ合衆国のフィラデルフィアという限定的文脈でもちえた表象作用を探究している。最後に、失明に伴う困窮時にダドレーを救うトウモロコシを原材料とする「インディアンの食事」に注目している。

結章では、第1章から第7章までのトランスアトランティック・トランザクションの諸相を総合的に意義付け、〈アメリカ文学〉前史として持ちうる意義を明確にしている。

審査の結果の要旨

本論文は、トランスアトランティックという地政学的枠組を導入し、初期近代から啓蒙主義時代の大西洋の兩岸を往還した多数の人々、物事、テキスト群、つまりトランスアトランティック・トランザクションを考察し、アメリカ文学研究に新たな側面—アメリカ文学前史—を付加することを目指した斬新な研究である。

本論文の著者は、アメリカ文学前史を形成する初期近代西洋科学史、とりわけ王立協会史と植民地期アメリカ科学史を統合し、これまで別個に捉えがちであった初期近代の大西洋の兩岸における科学的実践を、共有された地政学的枠組の内部における相互関連の実践として捉え直している。また、こうした科学的実践のテキストを現代的な意味における文学成立以前の〈文学〉として扱うことにより、植民地期アメリカ文学研究の新たな側面を開拓している。

アメリカ合衆国および合衆国文学の起源をピューリタニズムに見出すという伝統的な歴史観・文学史観を問い直す近年の一連の試みのなかにあつて、本論文は特別に注目されるべき意義をもつものである。伝統的アメリカ文学史に対する問い直しは、『コロンビア大学合衆国文学史』（1988年）に代表されるように、もっぱら多民族主義の立場から、複数の起源をもつ文学史として書き直すという方向性を取ってきた。それに対して本論文は自然科学を基幹とする知性史に注目し、ナショナルな文学の起源がトランスナショナルなネットワークによって初めてもたらされたものであることを見事に解明している。これは多元論や多民族性によって伝統的な文学史を加筆修正する試みとは一線を画するものであり、まさに画期的な研究成果として評価できる。各章の問題設定はいずれも切れ味がよく、新たな洞察を示し、知性史とアメリカ文学研究の双方にわたる著者の優れた資質を物語っている。特に第6章と第7章では、徹底したリサーチにより深化する展開が見られ、著者の進境ぶりを示すものとして、いっそう高い評価に値する。

以上のように、本論文は力作であるが、課題がないわけではない。本論文の一部でトランスアトランティックという地政学的枠組と知識の枠組とが必ずしも十分に統合されていない。さらに、本論文がトランスアトランティックな知性史を論じるにあたり、広義の「科学」の果たした役割をここまで強調したこと自体の根拠と妥当性は、十分論証されているとは言い難い。

とはいえ、このような課題への取り組みは著者の今後の研鑽に託されるころのものであり、アメリカ文学前史の考察として本論文が提示した成果は、優れていると判断される。

よつて、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。